

## 学会長退任の挨拶

政策研究大学院大学 刀根 薫



早いもので会長を拝命してからもう2年が経ちました。2年目が学会40周年に当たり本部ならびに各支部で記念行事を盛大に行ったことがイベントとして印象に残っています。その折、多くの会員の方々とORの現状について率直に語り合うことができたことは私にとって貴重な経験でした。80才台から20才台まで、実業界から学界まで、OR学会はきわめて広いスペクトラムをもっています。しかし、このように多種多様な人々がORという接点でつながり、たちまち旧知のような仲間意識を持つようになるのがこの学会のよい特長であります。40年前に、無から有を作るという困難な仕事をなされ、組織の基盤を固め、全国的に学会を統一された先駆者の方々の情熱と英知とご努力には頭が下がるばかりです。また、各支部でORマインドのある人々をさそって支部建設に当たられた先覚者の方々のご努力と情熱に対しても厚く感謝いたします。今回、近藤次郎先生を委員長とする40周年記念事業委員会のご尽力で記念シンポジウム以外に、さまざまな記念事業が進行中であり、またこれから始まります。若手研究者の海外渡航旅費の補助、専門書の出版、OR事典の改訂、1999年に北京で開かれるIFORSへの援助、海外のジャーナル(Omega)でのアジア太平洋地域特集号の編集、40周年記念懸賞論文の募集と表彰等です。その上、かねてから念願であったホームページの開設も具体化してきました。これらは学会の基盤の強化に役立つと信じています。こういった事業を可能にした記念事業関係者ご一同に感謝するとともに、今後ともご協力の程よろしくお願いいたします。

さて、学会をめぐる環境は依然厳しいものがあ

ります。長期に及ぶ日本経済の低迷です。それは、賛助会員(会社)の減少という形で学会の財政を直撃しています。こういう時こそORが役立つということを世の中に示さねばならないのですが、残念ながらまだ学会にはそれだけの力がありません。もともと実学として誕生したORのはずですが、実業界と学界の連携はかつて程緊密ではありません。両者がもっと頻繁に接触する機会を作らねばなりません。実業界の抱えている問題を、学界の方で受け止めて解決策を共同研究する機会をもっと作る必要があります。そして、その結果を論文や報告書の形で表わすばかりでなく、user friendlyなソフトとして提供することが重要です。私はこれをTechno ORと呼びたいと思います。教育ももっとTechno OR中心であってよいのではないのでしょうか。アメリカにおけるそのようなソフトの盛んな開発と成功例を見るにつけても、我が国でももっとその面での貢献がなされることを期待します。

次期会長に就任される水野幸男氏はORのパイオニアであるばかりか、NECの今日を築き上げた最大の功労者であります。現在の我々の学会にとって最適の会長といえます。我々は最適解を見つけたのです。皆さん、新会長に協力して学会を新しい成長の軌道に乗せようではありませんか。

最後に、この2年間暖かいご協力と励ましのお言葉を頂いた多くの方々にこの欄をお借りして厚く御礼申し上げます。